

# どんなときに、目が輝きますか？

## ハイライト：

・研修における「教師の目の輝き」と置き換えて

・課題意識を高めることは、「目の輝き」を生み出す基盤です。

・野口先生の授業の「課題意識」と「目の輝き」

・小林先生の授業の「課題意識」と「目の輝き」

・協議会で、授業づくりのポイントを共有しましょう。

## 研修における「教師の目の輝き」と置き換えて

5月12日、2年1組の豊原先生と3年1組の植田先生に、国語科の学習を公開していただきました。「子どもの目が輝く学習の創造」というテーマに基づいて近接学年チームで授業づくりに取り組んでいただいたことで、曖昧な点が明らかになり、協議を通してめざす子ども像の具体化と共有化を図っていくことができました。

今回の研修の講師である木庭先生からの指導・助言の冒頭に次のような問いかけがありました。「このような授業研修会で、先生方の目が輝く時はどんな時ですか。」

先生方からの答えは、「明日にでも使えるものを学んだ時」「新しいものを学んだ時」「自分の課題が解決した時」等、様々なものが出されました。研修会の中で、新たな発見や価値を見出した時、自分の指導に役に立つことを得た

りした時、私達教師の目は輝いているはずです。

また、その時の教師の目の輝きの大きさは、研修にどれだけ本気になって取り組んでいるか、どれだけ切実感をもって取り組んでいるかによって変わってきます。

公開授業後、豊原先生と植田先生が木庭先生から個別に指導を受けている場に同席しました。その時の2人の先生方の目はまさに輝いていました。それは、今回の授業づくりに本気で取り組んでいたからこそその輝きであり、自分の課題が解決したからこそその輝きだったのです。

このような「教師の目の輝きを生み出す研修」と「子どもの目が輝く学習」は、実は同じものなのです。子どもの目が輝く姿を、自分の研修での経験と置き換えて考えていきましょう。

## 課題意識を高めることは、「目の輝き」を生み出す基盤です。

では、私達は、子どもたちにとって楽しい学習活動を設定し、笑顔で目をキラキラとさせていけばよいのでしょうか。

答えは、当然、否です。子どもたちが活動を楽しんでいるだけでは、久原小学校がめざしている「子どもの目の輝き」を生み出していくことはできません。子どもたちが、学習に本気になり、切実感をもって取り組んでいる時に初めて生み出されるものなのです。

そのためには、子どもたちの課題意識を高めることが不可欠となります。ここでは、「子どもがしたいこと」と「教師がさせたいこと」が一致する価値ある課題を設定していかなければなりません。

例えば、今回、豊原先生が行った2年生「書いてあることを正しく読もう」の学習では、課題として、「たんぼぼはかせになろう」というものが設定できます。

この課題は、子どもの追究意欲に働きかける課題であり、追究することによりねらいとする指導事項が身につく課題でもあります。子どもたちは、単元を通して、「たんぼぼはかせになりたい」という思いをもって学習に取り組み、そのために、順序に気を付けて教材文を読み取っていきます。そして、一連の学習活動の中で、新しい発見や価値を見出した時、子どもたちの目は輝いていくのです。課題意識を高めることは、「目の輝き」を生み出す基盤になるのです。

## 野口先生の授業の「課題意識」と「目の輝き」

課題意識は、単元レベルと1単位時間レベルで分けて捉えていきます。算数の学習においては、1単位時間での課題意識に重点をおいて考えていきましょう。

野口先生の授業で課題意識は、「分数÷分数の計算の意味を、図・式・言語でわかりやすく説明したい。」という思いとなります。これは、本時学習のねらいと重なるものです。つまり、本時学習のねらいを、子どもたちがどれだけ自分の課題として捉えているのかが大切なのです。

そのためには、問題把握と見通しの段階で、疑問やズレを生み出し、課題

追究への見通しをしっかりともたせていく必要があります。

このような課題意識をもって追究した考えをもとに行う「聴き合い・語り合い活動」は、子どもたちにとって有意義なものとなり、「わかった。そういうことか。」「こんな方法で説明できるんだ。」「やってみよう。できそうだ。」といった目の輝きを生み出していくこととなります。

言い換えれば、「聴き合い・語り合い活動」の内容を、子どもたちにとって「聴きたい」という切実感のあるものにできれば、子どもの目の輝きはさらに大きくなっていくのです。

高い課題意識が、聴き合い・語り合いを深め、目を輝かせます。



## 小林先生の授業の「課題意識」と「目の輝き」

小林先生の授業での課題意識は、「650の数直線上の位置を、図を使ってわかりやすく説明したい」という思いになります。

1目盛が10ずつ増えていく数直線の意味を理解することは、数概念が不十分な子どもたちにとって抵抗があるものです。高学年になっても、その意味理解が不十分な子どもも残っています。だからこそ、大切な指導内容であり、課題意識を持たせていくための疑問やズレを生み出しやすい学習でもあります。

この学習での「聴き合い・語り合い

活動」は、650の数直線上の位置を図を使って説明していくことです。わかりやすく説明していくためには、1目盛りが10になることを工夫して説明していくことが必要となります。

子どもたちは、自力追究の段階で、図を囲んだり、数直線に書き込みをしたりしながら、自分の考えを工夫して表現していきます。そして、その表現方法の違いから、650という数のとらえ方を広げ、新しい数理を獲得していくことになるのです。新しい価値を見いだした子どもたちの目は、きっと輝いているはずです。

## 協議会で、授業づくりのポイントを共有しましょう。

全体司会（井上）記録（江崎）	於：会議室
1 講師紹介（校長）	15：10
2 協議	15：15～16：00
・グループ協議（KJ法）	
・報告（低学年：豊原 高学年：木原）	
・まとめ（井上）	
3 指導助言（安部指導主事）	16：00～16：40
4 謝辞（教頭）	16：40

【低学年部】	豊原（コーディネータ） 小林 案浦 小山 松原 半田
【高学年部】	木原（コーディネータ） 野口 西田 川見 江崎 四元
※授業写真（教頭・主幹・井上）、通信（半田、四元）	
※【中学年部】	植田・田代・大穂・高山
	町人権教育実践交流会 板書発問協議